

33 アートの会 11 月度 座学 報告

日時；11 月 19 日 水曜日 13:15 から 16:00

場所；市民センター @211 室 7156

参加者；稲垣、小林猛、塩路弘子、庄司、高濱、辻井、永井、梶本、光長、山川恵子、山崎、
安楽院（記） 計 12 名

大ゴッホ展紹介 葛飾応為特集

来月の鑑賞会に先立って、新・美の巨人たちで「大ゴッホ展」の紹介番組があった。事前に学習しておくとも興味が増す話題が盛りだくさんだったので、急遽割り込みで入れてみた。

今回は浮世絵の世界に戻り、葛飾北斎の娘、応為を取り上げた。映画と NHK の番組。

1. 新・美の巨人たち「上野樹里が登場！ゴッホの名作に会いに行く」 13:15-13:40

ゴッホが人生の最も幸せな時期に描いたとされる「夜のカフェテラス」が 20 年ぶりに来日。神戸で公開されている。

近年この絵を巡り新たな解釈や発見が相次いでいた。

黄金色に輝くカフェに集いダンスする男女の姿は幸福感の表現だと思われてきたが、実は人間の闇を描いていた？！

そして深い青色の星空にゴッホが託したメッセージとは？

いつもは番組ナレーションを担当する上野樹里が今回、特別出演！

ゴッホの絵の謎解きに挑む。



感想；今年 2025 年と 2028 年の 2 回に分けて「大ゴッホ展」が開催される。震災復興を記念して開催されるため、福島や東京へも巡回する。

ゴッホの初期の作品も展示される。

この絵の読み解きには、びっくりした。“聖と俗”が描き分けられている。聖とは夜空の輝き、俗とは黄色で表現されるカフェのこと。当時のカフェとは、いわゆる娼館、いかがわしいところ、墮落人たちがお酒におぼれる底辺の人間のたまり場だったとのこと。

ゴッホは、戒めの為、この絵を描いたのだ。しかし、神の子であり、牧師の息子であるゴッホには、聖なる存在を表現したいという内なる欲求が心の底にあったのだ。

カフェにたむろする人たちの真ん中に、扉の棧の十字架を背負った白い服の人物を描いている。これがイエスキリストだということだ。よく見ると、ウェイターのほかに、客は 12 人いる。これはつまりキリストと 12 人の使徒を描いた作品なのだという。

色目の美しさに魅かれて、“きれいな絵だなあ”としか見ていなかったが、なるほど黄色と濃

い青色とは補色の関係にある。つまり両極端の色、だから聖と俗になるのだ。
また、写生した時のアルルの夜空の星々も、正確に描いていることも教えてもらった。

2. 映画「百日紅」

2025 年 90 分

13:40-15:10

江戸風俗研究家で文筆家や漫画家としても活躍した杉浦日向子の漫画代表作「百日紅」をアニメーション映画化。浮世絵師・葛飾北斎の娘で、同じく浮世絵師として活躍した女性・お栄が、父・北斎や妹、仲間たちとともに生きた姿を、江戸の町の四季を通して描く。

北斎と娘の破天荒な創作と喜怒哀楽の日々が、現代に息づく傑作アニメに

欄干の前に毅然と立つ女、200メートルにも及ぶ木造の両国橋を行き交う町人たち、ストーンズ風ロックのBGM、そこから視点が浮上し江戸の全景を俯瞰するショットへ。印象的な冒頭のシークエンスから、「浮世絵」「江戸の風俗」「親子と男女」といった古い題材に現代の感性と技術を注ぎ込み、平成の世に息づくアニメを創造しようという原恵一監督の気概が伝わってくる。

原作は、漫画家で江戸風俗研究家でもあった杉浦日向子が昭和後期に発表した代表作「百日紅」。主人公お栄（葛飾応為）は葛飾北斎の三女で、父親と同じ浮世絵師の道を選び、美人画などで高く評価されたという。そんな彼女の視点から、奇行で知られた北斎の創作をめぐる逸話や、居候の絵師も交えたオンボロ長屋での風変わりな共同生活、お栄自身の絵師としての試練と不器用な恋が語られる。

アニメーション制作の Production I.G と原監督は初のタッグ。原作漫画と浮世絵の豊穣な世界を2Dアニメで再現しつつ、街並みや建物、橋などにはパースペクティブを強調した3D描画を織り込むことで、カリカチュアライズされた妙味と引き込まれるような質感、奥行き感を両立させた。船遊びに出た穏やかな川面がにわかに荒れて、有名な北斎画「神奈川冲浪裏」の逆巻く波になるダイナミズムは、アニメならではの楽しさだ。



感想；うたい文句にあるように、江戸の風俗がありありと描かれていて、江戸の雰囲気がよく伝わり、江戸散歩を自分もしているように感じることもできる映画であった。実写ではこのように感じるの、なかなか難しいだろうと思う。

しかし、声優陣がよくなかった。人物のイメージとかけ離れた声に、戸惑った方も多いと思

う。そこが残念な点である。

3. 休憩

15:10-15:20

4. 新・美の巨人たち 葛飾応為「吉原格子先之図」×高島礼子

中止

あの北斎の娘、葛飾応為が描いた異色作が、今回の作品「吉原格子先之図」。華やかな吉原の情景が、光と影の強烈な対比によって描かれています。

浮世絵に精通した彼女は、独自の技法を駆使し、様々な光と影を描き分けています。

そんなこの絵には、ある謎が。

居並ぶ花魁の表情はなぜか隠され、全身が黒く塗りつぶされた者までいます。

自ら北斎の影として生きた女性絵師、葛飾応為は、この光と影の中に、吉原の何を描こうとしたのでしょうか？



4. ヒストリア「おんなは赤で輝く 北斎の娘・お栄と名画のミステリー」 15:20-16:00

葛飾北斎の娘・お栄こと葛飾応為を特集する。“赤”への執着や、緻密な“線”や“光”の描き方など、北斎には見られない、お栄独自の筆の痕跡を、最新の科学調査と高精細の4Kカメラで両者の作品を検証し、浮かび上がらせる。また、お栄が北斎と滞在した長野・小布施を、あさひアナが探訪。父と娘の創作秘話に迫る。



感想；取り締まりにうるさい江戸を離れて、信州の小布施でパトロンとして経済的援助を与えた儒学者・高井鴻山に招かれた北斎とお栄。二人はこの地で多くの絵を描いた。80を過ぎたなお創作意欲さかんな北斎とともに、お栄が挑んだのは「巨大天井絵 八方睨み鳳凰図」岩松院 蔵の制作だった。

いまなお、この赤い色が色あせていないのは、岩絵の具のおかげでしょう。

とにかく迫力が凄い。

京都のお寺の天井画の龍は、水墨画が多いと思うが、どうして、長野県や新潟県（先日見た日本のミケランジェロ石川雲蝶の天井画；西福寺）では、こうも色鮮やかなのでしょうか？ 冬には、外が一面の墨化粧になるので、色が恋しくなる人情に応えたものだからでしょうか。

以上